

編集後記

▼「中央教育審議会」が再開され(四・二四)、西岡文部大臣は「臨教審」答申の意向を受けて「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革」について諮問しました。示された主たる審議事項は、「後期中等教育の改革とこれに関連する高等教育の課題」と「生涯学習の基盤整備」です。「生涯学習体系への移行」は「臨教審」教育改革の主軸でもあります(本誌一八号八木論文参照)。

▼当初、本号では、「生涯学習と進路・進学問題」を新潟の現実に即して問題提起したいと考えました。しかし編集部力量不足もあって、せっかく三ツ井・手島両氏の論稿をいただきながら、これを包括する論文を用意できないままに終わりました。重要な課題ですので、後日を取りたいと思います。

▼汐見氏の論文(講演)は、今日の子どもたちをめぐる問題状況を「文化」の問題として抉り、高度に情報化する文化が

子どもたちにとってどういう意味を持つか、を明らかにしようとしたものです。「子育て・教育」に欠かせないだじな視点が提起されています。(片岡 弘)

▼「教育動向」を書くために四月から六月までの日刊紙、週刊紙合わせて十紙に目を通しました。四月は学校の年度初め、当然教育記事が多く出ています。日が経つにつれて減少しています。試行の段階で大きく取り上げられた初任者研修は、実施されてからは記事にならなくなりました。しかし、事実は計画通り、確実に進行しています。

▼年度初め、新潟市の公会堂で第一回の初任者講習会が開かれました。十時三十分開会なのに、九時三十分頃から続々と受講者が参集、十時すぎには全員席につくという真面目さ。出席率は100%。県教委は「都合のつかない場合は出席しなくともよいのですよ」と言っているのだが、学校も該当者もすべてに優先させ、文字通り万障繰り合わせて出席しているのが実状です。これは門前で組合加入のチラ

シ配布をした人から聞いた話です。「組合もこの真面目さを見習うべきだ。」「チラシを抵抗なく受け取ってくれたのがせめてもの救いだ。」とこの人はつけ加えました。

▼上から降ってきた「生涯学習」と「ふるさと創生」にどここの地方自治体でも戸惑っているようです。新発田市も例会ではなく、高齢者学級の生徒数は年々減少、ゲートボールは花盛り。(若月又次郎)

にいがたの教育情報 No. 22

1989年7月31日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所
 発行人 八木三男
 新潟市東中通1-86 山崎ビル2F
 〒951 電話(025)228-2924
 振替口座・新潟4-12332
 印刷所 (有)あかつき印刷所
 長岡市新産4-4-7